

芥川龍之介の蔵書から浮かび上がる古代ギリシャ文学

フェレイロ・ポッセ、ダマソ

広島大学森戸国際高等教育学院 助教

芥川龍之介は西洋古典（特に古代ギリシャ的）なる要素を様々な作品で引用しただけでなく、自分の作品にも西洋古典を一つのモチーフとして流用してきた。本発表では、まず『芥川龍之介文庫目録』を分析し、芥川がどのような西洋の〈古典的な文献〉に直接触れていたのかを確認した。次に、芥川の愛読していた洋書文庫を一覧し、どのような作家を媒介にして西洋古典と間接的に接触していたのかを明らかにした。この分析を行うため、『芥川龍之介全集総索引』（宮坂、1994）の「総索引」、「人名索引」、「引用作品索引」と『芥川龍之介文庫目録』から得た情報を基に、図表を作成した。最後に芥川を取り囲んでいた当時の西洋古典状況に対して、二点ほど考察を加えた。

一点目は、明治・大正期にはまだ翻訳されていなかったエピクロスやエンペドクレス、アキレウス・タティウスなどの名が、芥川の作品に引用されていることに関して、芥川は彼らについての心得を、近代作家から——この場合は間テクスト性の問題が関わってくる——、あるいは当時の日本に存在していた古代文献の英訳、仏訳、独訳などを通じて得たと考えられる。これらの翻訳状況については改めて検討したい。

二点目は、大正時代における芥川文学の位置付けに関する考察である。明治政府が国際交流を積極的に実施することによって、古代ギリシャ・ローマが日本に浸透し、日本文学者の関心が呼び起こされていった。西洋古典が翻訳・紹介されるのに伴い日本文学・宗教を古代ギリシャのそれと比較・対照した研究がなされるようになった。似たような比較を作品（「神神の微笑」等）のモチーフとした芥川龍之介もこの過程の中に位置づけることができる。